

初期仏教における修行道の発展

The Development of the Path to Liberation in Early Buddhism

文学研究科人文学専攻博士前期課程修了

古 川 洋 平

Yohei Furukawa

漢訳の阿含やパーリのニカーヤ等の阿含經典中には、在家者が出家を決意し戒を守り定を修め智慧を獲得し最終的に解脱に至るという、ある一定の形式を持った段階的な修道項目が説かれている場合がある。これは先行研究者によって「修行道」と呼ばれ、三学の詳説部分と解釈されており、出家者が辿るべき基本的なステップアップの図式を説いたものと位置付けられている¹。

修行道は多くの資料に説かれるが、その形式は必ずしも一定しておらず多様である。この点については既にBucknell氏・田中教照氏・南清隆氏等が触れており²、諸氏の見解に相違はあるものの、修行道が段階的に発展し増広されていったという見方については共通していると言える。本稿において筆者は、このような諸氏の研究成果を踏まえつつ、阿含經に説かれる修行道を整理し、その系統を分類しながら、三学の詳説たる修行道の発展について若干の検討を試みたいと考える。

I. 修行道の用例とその古形

修行道はパーリ『長部』・『中部』とその相当經を中心に、北伝・南伝を問わず諸資料中に説かれている。このことは伝承されたものとしての教法が四部・四阿含の体裁に同時に纏められる以前に³、既に修行道の骨子が成立していたことを示しているのであろう。とすれば、諸資料中に説かれる修行道の形式に共通する部分を抽出していけば、具体的な内容はともかくとしても、形式的には古い修行道を想定できると考えられる。以下、修行道の基本的な形式をあげた後で、諸資料中に見られる修行道の形式を一覧にまとめることにする。便宜上、『長部』『戒蘊品』等に説かれる修行道を「戒蘊品系の修行道」、『中部』等に説かれる修行道を「中部系の修行道」と呼ぶ。まず両系統の修行道を説く資料を示す。

¹ 宇井伯寿「八聖道の原意及びその変遷」(『印度哲学研究』第3巻3頁-61頁)、西義雄『原始仏教に於ける般若の研究』294頁-299頁、赤沼智善『原始佛教之研究』95頁-120頁等。

² Bucknell, R. "The Buddhist Path to Liberation: An Analysis of the Listing of Stages", 田中教照『初期仏教の修行道論』169頁-196頁、南清隆「三学の成立と発展」。

³ 前田恵学『原始仏教聖典の成立史研究』673頁-679頁。

・戒蘊品系の修行道：『長部』「戒蘊品」全13経、漢訳『長阿含』「第三分」全10経、有部系の『長阿含』「戒蘊品」⁴、『根本説一切有部律』「破僧事」中の「沙門果経」相当部分⁵、『四分律』「雜事健度」の末尾部分⁶、漢訳『寂志果経』、『佛開解梵志阿毘経』、『梵網六十二見経』、藏訳『梵網経』⁷、『ウパーイカー』(*Abhidharmakośatikopāyikā*)中に引用される「梵網経」⁸

・中部系の修行道：『中部』(第27, 38, 39, 51, 53, 60, 76, 79, 94, 101, 107, 112, 125)、『増支部』(*AN. II*, 208頁-211頁, V, 204頁-209頁)⁹、『人施設論』¹⁰、『中阿含』(第19, 65, 80, 104, 144, 146, 182, 187, 198, 204, 208)・『集異門足論』¹¹、『数経』

1. 修行道の基本的な内容

次に修行道の基本的な内容を理解するために、その代表として『長部』「戒蘊品」中の「沙門果経」に説かれる修行道の概要を示す¹²。戒蘊品系の修行道は1つの品の中で大体共通して説かれているという点で中部系の修行道と相違する。

①如来の出現と梵行の開示

如来がこの世に出現する。如来はこの世とそこに生きる生きもの達をよく知り、完全無欠で清浄な梵行 (*brahmacariya*) を明らかにする。

②発心と出家

如来の教えを聞いた者が如来に対して信仰心 (*saddhā*) を得る。彼は在家生活が梵行を修めるためには相応しくないと考え、財産や親族を捨てて出家する。

③パーティモッカによる防護

彼は出家者となり、パーティモッカ (*pātimokkha*) による防護により守られ、行いとそれを行う場

⁴ 有部系の『長阿含』の構成についてはHartmann, J.U.“Contents and Structure of the *Dirghāgama* of the (Mūla-) *Sarvāstivādins*”を参照した。修行道の内容に関しては松田和信「梵文長阿含の *Tridaṇḍi-sūtra* について」を元に、*SBV* の内容を梵文仏典研究会「梵文「沙門果経」和訳 (1)」、同「梵文「沙門果経」試訳 (2)」を参照しつつ検討した。ただし松田氏は「戒蘊品」の冒頭2経を報告したのみであるから、「戒蘊品」に説かれる経が一貫して修行道を説くかどうかは不明である。

⁵ *SBV. II*, 230頁-251頁。

⁶ 『大正蔵』第22巻 962頁b-966頁a。山極伸之「パーリ長部「戒蘊品」と律蔵」を参照。

⁷ 典拠については細田典明「『梵網経』と『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』」を参照のこと。

⁸ 『ウパーイカー』中に引用される『梵網経』については本庄良文「シャマタデーヴァの伝へる阿含資料-世品 (5) 「梵網経」-」を参照。なお、上記の2つの藏訳資料に関してはここでは扱わなかった。

⁹ 山極氏前掲論文を参照。

¹⁰ *Pp.*, 56頁-61頁。

¹¹ 『大正蔵』第26巻406頁c-407頁b。『集異門足論』と上掲の『人施設論』の修行道については田中氏前掲書を参照した。両資料の修行道は「自他共に苦しめない人」の説明として説かれており、これは『中部』第51や『増支部』IIの修行道の説かれる場合と一致し、有部系『長阿含』「戒蘊品」の「ブドガラ経」(*Pudgala-sūtra*) の場合とも符合するようである。(Hartmann氏前掲論文を参照)

¹² *DN. I*, 62頁-85頁。戒蘊品系の修行道には項目によって種々の比喩が挿入されているが、ここでは取り上げない。中部系の修行道では基本的に比喩が用いられない。

所を具えて住する。僅かな罪にも畏怖を見て、学処（sikkhāpada）を受持して学ぶ。

④戒蘊の説示

戒蘊（小戒・中戒・大戒）に説かれる項目（戒）を具える¹³。

⑤安楽の経験

このようにして彼はこの聖なる戒蘊（ariya-sīlakkhandha）を具え、（心の）内に過失の無い安楽を経験する。

⑥感官の防護

彼は眼根によって色（rūpa）を見つつもその相に執着しない。眼根を防護し、諸の不善法（akusalā dhammā）が流れ込まないように努める（以下耳根・鼻根・舌根・身根・意根についても同じ）。

⑦正念正知を具える

彼は進むにも退くにも、前を見る時も後ろを見る時も、（腕を）曲げる時も伸ばす時も、大衣を着け、鉢を持ち、衣を着ける時も、食べる時も、飲む時も、嘔む時も、飲み込む等々の時も正知（sampajañña）を具えて行動する。

⑧衣鉢の携帯と知足

彼は身を包むだけの衣と腹を満たすだけの托鉢による食物で満足し（santuṭṭha）、どこに行くにもそれだけを持っていく。あたかも翼を持つ鳥が飛ぶところにはどこにでも翼を持って飛ぶようなものである。

⑨五蓋の除去

彼は森・樹下・山・峡谷・洞窟等の（人里から）離れた坐臥所に親しむ。食後に乞食から戻ると、両足を組み、身体を真っ直ぐにし、面前に念を集中させて座る。そのようにして彼は世界に対する五蓋を捨て、これらから心を浄化する。

⑩四禪の修習

五蓋を除去した彼は四禪を順次に修め、尋（vitakka）と伺（vicāra）を伴わず、不苦不楽の境地である第四禪に到達する。彼はこの身体を清浄で浄化された心によって満たし、座る。その身体のどこにも清浄で浄化された心の触れないところはない。

⑪智見の獲得と意所成身の創造

四禪を修することにより心が浄化された彼は智見（ñāṇa-dassana）に心を傾け、向ける。そして彼は「私のこの身体は色を有し、四大要素（地・水・火・風）より成り、母と父から生まれ、飯と麦菓子で養われたものであり、無常で、衰え、摩滅し、断絶し、破壊される性質のものである。またこの私の意識はここに依存し、ここに結ばれている」と、このように知る。

さらに彼は意から成る身体（manomaya-kāya）の創造に心を傾け、向ける。そして彼はこの身体から、

¹³ 項目数が多く煩雑になるので戒の具体的な内容の説明は省略する。なお『長部』の戒蘊は小戒（26項目）・中戒（10項目）・大戒（7項目）に分類される。（DN. I, 5頁, 8頁, 12頁を参照のこと）

別の、色を有する、意から成る、全ての肢を有する、欠けることなき感官（を持つ）身体を創造する。

⑫六神通

心が浄化された彼は六神通（神足通・天耳通・他心通・宿命通・天眼通・漏尽通）を順次に獲得し、解脱する。

⑬解脱・解脱智見

彼は貪欲の漏（煩惱）から心が解脱し（心解脱）、また生存の漏から心が解脱し、無明の漏から心が解脱し、「解脱した時には解脱した」という智が生まれ、「再生は尽きた。梵行は完成された。なすべきことはなされた。もはやこの状態（生存）に生まれ変わることは無い」と知る。

2. 戒蘊品系の修行道の古層

戒蘊品系の修行道の基本的な内容は以上の如くである。この系統の修行道はその名の通り『長部』『戒蘊品』とその相当資料（漢訳『長阿含』『第三分』、及び有部系の『長阿含』中の「戒蘊品」）に説かれる。三者の形式を『根本説一切有部律』『破僧事』、及び漢訳『寂志果経』に見られる形式と合わせて一覧にすると表1ようになる。

<表1> 戒蘊品系の修行道の比較表

		『長部』	漢訳『長阿含経』	有部系『長阿含経』	『根本説一切有部律』 「破僧事」	『寂志果経』
1	如来の出現	○	○	○	○	○
2	発心と出家	○	○	○	○	○
3	パーティモッカによる防護	○	×	○	○	○
4	小戒	○	○	○	○	○
*	衣鉢の携帯と知足	×	○	○	○	×
5	中戒	○	○	○	○	○
6	大戒	○	○	○	○	○
*	衣鉢の携帯と知足	×	×	×	×	○（聖戒品）
7	安楽の経験	○（聖戒蘊）	○（聖戒）	○（聖戒蘊）	○（聖戒蘊）	
8	感官の防護	○	○	○	○	○
9	適切な食事	×	○	×	×	×
10	覚醒への努力	×	○	×	×	×
11	四念処	×	○	×	×	×
12	正念正知	○	○	○	○	×
13	衣鉢の携帯と知足	○	×	×	×	×
14	五蓋の除去	○+比喩	○+比喩	○+比喩	○+比喩	○+比喩
15	四禪	○+比喩	○+比喩	○(+比喩)	○+比喩	○+比喩
16	智見	○+比喩	意所成身+比喩	×	×	○+比喩
17	意所成身	○+比喩	智見+比喩	×	○+比喩	○+比喩
18	六神通	○+比喩	○+比喩	三明(+比喩)	○+比喩	○+比喩
19	解脱・解脱智見	○	○	○	○	○

上の表を見ると、13の「衣鉢の携帯と知足」¹⁴の項目が資料によって様々な位置にあることが注目される。また、漢訳『長阿含』『第三分』に説かれる修行道には9, 10, 11の項目が含まれていることが

¹⁴ 以下修行道の項目を「 」付きで示す。

特徴的で、16「智見」と17「意所成身」は有部系『長阿含』では説かれず、「破僧事」に引用される「沙門果經」では「意所成身」のみあり、漢訳『長阿含』では両者の順序が逆になっている。このように資料によって共通性が低い修行道の項目が見られることは、戒蘊品系の修行道に共通する古層部分、即ち上座部系統の古層がそれぞれ部派的な改変を蒙った結果であるということを示しているであろう。特に13「衣鉢の携帯と知足」については、それが本来どの段階に存したのか、あるいは存しなかったのかは表の比較からは分からない。

それに対して、これらの修行道に共通する部分を見ると、表の1, 2, 4, 5, 6, 8, 14, 15, 19の項目が全ての修行道で共通している。12の「正念正知」は『長部』・『長阿含』に所属していることが確実な経が説くから、一応この項目も古層に含まれる可能性を有すると考えられる。18の「六神通」は有部系『長阿含』では三明になっており、漢訳『長阿含』「第三分」の第3「種徳經」以下の経も六神通ではなく三明を説くから、古層の形式が元々六神通を説いていたかどうかについては疑わしい。もっとも、六神通は三明に神足通・天耳通・他心通を加えたもので、六神通中の三明は全ての修行道で説かれていると考えられるから、三明をそれらに共通する古層部分と考えることができる。以上のように考えれば、1, 2, 4, 5, 6, 7, 8, (12), 14, 15, 18 (三明部分), 19の項目が戒蘊品系の修行道の古層にあると推定できるのである。(表1の内、番号が網掛けされた項目がそれにあたる)

3. 中部系の修行道の検討

次に中部系の修行道の検討に移ろう。中部系の修行道は、『長部』や『長阿含』に説かれる修行道のように1つの品の中で共通して説かれるというような性格のものではなく、その形式も多様である。以下中部系の修行道の形式を分類・検討していくが、ここではその類型を全てあげることではできないので、代表的なもの(とその相当漢訳)の形式を列挙する。

(1) 『中部』第27「小象跡喻經」と『中阿含』第146「象跡喻經」

『中部』「小象跡喻經」	『中阿含』「象跡喻經」
①如来の出現と梵行の開示	①如来の出現と梵行の開示
②発心と出家	②発心と出家
③戒蘊の項目を守る (小戒のみ)	③從解脱 (パーティモッカ) による防護
④衣鉢の携帯と知足	④戒蘊の項目を守る (小戒のみ)
⑤安樂の経験	⑤衣鉢の携帯と知足
⑥感官の防護	⑥安樂の経験
⑦正念正知	⑦感官の防護
⑧五蓋の除去	⑧正念正知
⑨四禪	⑨五蓋の除去
	⑩四禪

- | | |
|----------|-------------|
| ⑩三明 | ⑪漏尽知（四諦の観察） |
| ⑪解脱・解脱智見 | ⑫解脱・解脱智見 |

（2）『中部』第39「大馬邑經」と『中阿含』第182「馬邑經」

- | | |
|-------------------------|-------------|
| 『中部』「大馬邑經」 | 『中阿含』「馬邑經」 |
| ①慙愧（hirottappa）を具えること | |
| ②身の行い（kāya-samācāra）の清浄 | ①身の行いの清浄 |
| ③口の行い（vācī-samācāra）の清浄 | ②口の行いの清浄 |
| ④意の行い（mano-samācāra）の清浄 | ③意の行いの清浄 |
| ⑤生活（ājīva）の清浄 | ④生活の清浄 |
| ⑥感官の防護 | ⑤感官の防護 |
| ⑦適切な食事 | |
| ⑧覚醒への努力 | |
| ⑨正念正知 | ⑥正念正知 |
| ⑩五蓋の除去（比喩有り） | ⑦五蓋の除去 |
| ⑪四禪（比喩有り） | ⑧四禪 |
| ⑫三明（比喩有り） | ⑨漏尽知（四諦の観察） |
| ⑬解脱・解脱智見（比喩有り） | ⑩解脱・解脱智見 |

このうち「大馬邑經」の⑦「適切な食事」とは、身を保つ程度の食事に満足して食らず、身を安楽にさせること、⑧「覚醒への努力」とは、日中は勿論夜間も覚醒しているように努め、臥す時は心に乱れがないように集中して励むことである。同様の記述が漢訳『長阿含』の修行道にも見られる。中部系の修行道の形式を一覧にすると表2, 3のようになる。（便宜上、パーリ資料と漢訳資料の一覧を別個に表示する）以下、表を参照しつつ、これらの修行道を分類することにしよう。

4. 中部系の修行道の分類

表3を見ると、『中阿含』に説かれる修行道は『中部』に比べて中略や省略が多く、『中阿含』単独では系統を分類しきれないと思われる。そこでまず、筆者は『中部』を主とするパーリ資料中の修行道を分類する。その上で、『中部』の中に『中阿含』で修行道を説く相当經が7例あることを考慮に入れて、それを足掛かりに中部系の修行道全体の特徴を把握していきたい。

（1）パーリ資料中の修行道の分類

まずパーリ資料に説かれる修行道を分類する。表2を見ると、先に挙げた『中部』第27「小象跡喩經」に説かれる形式が全16例中7例（『中部』第27, 51, 60, 76, 79, 94と『人施設論』）で説かれていることが分かる。

＜表2＞パリー資料中の中部系の修道士の比較表

	MN.27 (146)	38	39(182)	51	53	60	76
1 如来の出現	○	○	×	○	×	○	○
2 発心と出家	○	○	×	○	×	○	○
3 パーティモッカによる防護	×	×	×	×	○	×	×
4 小戒	○	○	慙愧を具える、 身口意・生活清浄	○	×	○	○
5 衣鉢の携帯と知足	○	○	○	○	×	○	○
6 安楽の経験	○	○	○	○	×	○	○
7 感官の防護	○	○	○	○	○	○	○
8 正念正知	○	○	適切な食事・覚 醒の努力+○	○	適切な食事・覚 醒の努力	○	○
9 五蓋の除去	○	○	○+比喩	○	七正法	○	○
10 四禪	○	○	○+比喩	○	○	○	○
11 三明	○	○	○+比喩	○	前二明	○	○
12 解脱・解脱智見	○	心解脱・慧解脱	○	○	心解脱・慧解脱	○	○

	MN.79 (208)	94	101(19)	107 (144・『数経』)	112(187)	125(198)	AN. II
1 如来の出現	○	○	○	×	回想	○	○
2 発心と出家	○	○	○	×	○	○	○
3 パーティモッカによる防護	×	×	×	○	×	○	×
4 小戒	○	○	○	×	○	×	○
5 衣鉢の携帯と知足	○	○	○	×	○	×	○
6 安楽の経験	○	○	○	×	○	×	○
7 感官の防護	○	○	○	○	○	○	○
8 正念正知	○	○	○	適切な食事・覚 醒の努力+○	○	適切な食事・覚 醒の努力+○	○
9 五蓋の除去	○	○	○	○	○	○	○
10 四禪	○	○	○	○	○	四念処+第二～ 四禪	○
11 三明	○	○	○	×	漏尽知のみ	○	漏尽知のみ
12 解脱・解脱智見	○	○	×	×	○	○	○

	AN. V	『人施設論』
1 如来の出現	○	○
2 発心と出家	○	○
3 パーティモッカによる防護	×	×
4 小戒	○	○
5 衣鉢の携帯と知足	○	○
6 安楽の経験	○	○
7 感官の防護	○	○
8 正念正知	○	○
9 五蓋の除去	○	○
10 四禪	九次第定	○
11 三明	×	○
12 解脱・解脱智見	×	○

*網掛けした経はタイプBの修道士で、()内は『中阿含』等の相当経

次に、『中部』第39「大馬邑経」を除いて、「パーティモッカによる防護」の項目を説かない経（『中部』第27, 38, 51, 60, 76, 79, 94, 101, 112と『増支部』II, V, 『人施設論』）が常に「小戒」から「安楽の経験」までの項目を説いていることが分かる。これは「パーティモッカによる防護」がこれらの項目に代わって説かれていることを示していると考えられる。「大馬邑経」の場合はそのどちらでもなく、「慙愧を具える」・「身口意・生活清浄」の項目によって「小戒」から「安楽の経験」までの項目に代えているのであろう。

このように考えると、パーリ資料における中部系の修行道はまず「小戒」から「安楽の経験」までを説くものと、「パーティモッカによる防護」を説くものに分類できよう。例外的な要素を説く「大馬邑経」は、この経が「パーティモッカによる防護」を説く修行道と同じ「適切な食事」と「覚醒への努力」を説く点から考えて、これらと同じグループに配当するのが妥当であろう。

以上のようにパーリ資料中の中部系の修行道を大きく2つに分類した。この2つの系統を便宜上、「小戒」から「安楽の経験」までを説く修行道をタイプA、「パーティモッカによる防護」等を説く修行道をタイプBと呼ぶことにする（表中網掛けした修行道がタイプBにあたる）。

- ・タイプA= 『中部』 第27, 38, 51, 60, 76, 79, 94, 101, 112, 『増支部』 II, V, 『人施設論』
- ・タイプB= 『中部』 第39, 53, 107, 125

タイプAの修行道には、「如来の出現」の部分が出家比丘の回想に変わっているものや（『中部』 第112）、「三明」部分が漏尽知のみであったり（『中部』 第112, 『増支部』 II）、「解脱智見」を説かないもの（『中部』 第101）、「四禪」から九次第定に進み想滅尽定で修行道が終了しているもの（『増支部』 V）などがある。

タイプBの修行道は、先に示したように「パーティモッカによる防護」を説くことが特徴である。しかし、表を一覧して明らかなように、その中に全く同じ形式の修行道は見出せず、修行道の形式が経によって全て異なっている。共通要素であると言い得るのは「適切な食事」と「覚醒への努力」のみである。パーリ資料中タイプBの修行道の特徴を示せば、以下のようになる（これら以外の変化はタイプAと同じく同系統内での改変と判断できる）。

- ①タイプAでは「小戒」から「安楽の経験」に至る部分が、タイプBでは「パーティモッカによる防護」、もしくは「慙愧を具える」・「身口意・生活清浄」になっている。
- ②「感官の防護」の後に、タイプAには存しない「適切な食事」と「覚醒への努力」が挿入されている。（この項目は漢訳『長阿含』「第三分」の修行道にも見られる）
- ③修行道によっては他には見られないような項目（「七正法」等）が説かれている場合もある。

次に、漢訳資料中の修行道の分類を、漢パで共通して修行道を説く7経を手がかりに検討することにする。

（2）漢訳資料中の修行道の分類

表2と表3を比較すると、『中阿含』 第19, 144, 146, 182, 187, 198, 208は『中部』に修行道を説く相当経を有し、相当経の修行道は先ほどの検討によってそれぞれA, B, A, B, A, B, Aのタイプに配当される。

<表3> 『中阿含』等における修行道の比較表

	中19(101)	65	80	104	144(107)	146(27)	182(39)
1 如来の出現		×	回想	○	×	○	×
2 発心と出家		×	○		×	○	×
3 從解脱による防護		×	○		×	○	×
4 小戒	前略		○	省略		○	
5 衣鉢の携帯と知足		身口意清浄	○		身口意・生活清浄、四念処	○	身口意・生活清浄
6 安楽の経験		○	○		○	○	
7 感官の防護		×	○		○	○	
8 正念正知		○	○		○	○	
9 五蓋の除去	○	○	○	○	○	○	○
10 四禪	○	○	○	○	○	○	○
11 三明	漏尽知のみ	漏尽知のみ	六神通	漏尽知のみ	×	漏尽知のみ	漏尽知のみ
12 解脱・解脱智見	○	○	○	○	×	○	○

	187(112)	198(125)	204	208(79)	『集異門足論』	『数経』(107)	
1 如来の出現	回想	○	○	○	○	×	
2 発心と出家	○	○			○	×	
3 從解脱による防護	○	×	中略 (乃至)	中略 (乃至)	○	×	
4 小戒	○				○	○	
5 衣鉢の携帯と知足	○	身口意・生活清浄、四念処			○	○	身口意清浄
6 安楽の経験	○				○	○	
7 感官の防護	○	×			○	○	
8 正念正知	○	×			○	○	
9 五蓋の除去	○	×	○	○	○	○	
10 四禪	○	○	○	○	○	○	
11 三明	漏尽知のみ	×	漏尽知のみ	×	四諦の観察	×	
12 解脱・解脱智見	○	×		×	○	×	

*網掛けした経はタイプBの修行道で、()内は『中部』の相当経

表3を見ると、まず『中阿含』第19, 208は省略部分が多く、特徴が明らかでない。第146と187は「如来の出現」の部分相違するものの（この相違はタイプAにも共通する）、ほとんど同一の修行道を説く。これらは共通して「從解脱（パーティモッカ）による防護」（以下「パーティモッカによる防護」として一括する）を説きつつ「小戒」から「安楽の経験」までの項目をも説いている。しかしそれ以外にパーリ中部系タイプAと異なる部分は見当たらないので、一応同じ系統に含めることができると考えられる。これに対してタイプBの『中部』第125の相当経である『中阿含』第198の修行道を見ると、「小戒」から「五蓋の除去」までの項目が「身口意・生活清浄」及び「四念処」の修習になっている。「身口意・生活清浄」の項目はタイプBである『中部』第39「大馬邑経」にも同様に見られる特徴であり、「四念処」は『中部』125にも見られる項目であるため、『中阿含』198もタイプBの修行道であると考えられる。同様に『中阿含』第144, 182も相当経である『中部』第107, 39もタイプBに属すると見てよいであろう。以上の検討をふまえると、省略によってタイプ判別ができない形式が7例中2例あるものの、残りの5例は全て『中部』で分類した修行道のタイプが、そのまま『中阿含』の相当経が説く修行道にも通用すると言えるであろう。

その上で残りの修行道の系統を検討してみると、『中阿含』第65, 『数経』は「身口意清浄」を説く点から考えてタイプBに属すると考えられ、第80「迦絺那経」は六神通を説くものの修行道のタイプ

が「象跡喩経」等と同じなのでタイプAに、『中阿含』第104, 204は途中を省略しており、系統が判別できないという結果になる。『集異門足論』の修行道は『中阿含』146とほぼ同じ形式であるから、問題なくタイプAに含まれるであろう。

以上、漢訳資料に説かれる修行道をパーリ資料に説かれる修行道と関連させて分類すると、いずれの修行道も基本的に『中阿含』の系統が『中部』の修行道の系統にも当てはまるという結果になった。(表中灰色に網掛けした修行道がタイプBにあたる) 漢訳資料に説かれる修行道をタイプ別に分類すると以下ようになる。

- ・タイプA= 『中阿含』第80, 146, 187, 『集異門足論』
- ・タイプB= 『中阿含』第65, 144, 182, 198, 『数経』
- ・タイプ判別不可能= 『中阿含』第19, 104, 204, 208

そして説一切有部所伝の『中阿含』に説かれる修行道の特徴をあげると次のようになるであろう。

①『中部』の修行道は『中阿含』でも同タイプである。しかし基本的にタイプAは「小戒」から「安楽の経験」とともに「パーティモッカによる防護」も説き、「三明」の説示を漏尽知のみですましてしまっている。

②『中部』中のタイプBの修行道に見られる「適切な食事」・「覚醒への努力」の項目は『中阿含』の相当経には全く見られない。代わりに、「パーティモッカによる防護」が『中部』第39にも見られる「身口意・(生活) 清浄」に代わっている場合が多い。

以上の分類によって得られた結果は、少なくとも漢パに共通する修行道の古形が既にタイプ別に分かれていた可能性を示していると思われるが、この古形が経典発達史においてどこまで遡りうるかは明確ではない。パーリ資料と漢訳資料を比較すると、タイプAの修行道に関してパーリ資料は「パーティモッカによる防護」を説かずに「小戒」と「安楽の経験」を説くのに対して、説一切有部所伝の『中阿含』は一貫して「パーティモッカによる防護」を説きつつ「小戒」・「安楽の経験」を説き、「三明」の説示を漏尽知のみで済ませている。この相違はパーリ上座部と説一切有部の経の編集、さらに言えば修行道に対する両者の見方に由来するものであると言えるであろう。

5. 修行道の基本形式の推定

先の戒蘊品系の修行道の検討では、個々の資料に説かれている修行道を比較して、その共通要素を指摘し、戒蘊品系の修行道の古層と考えられる部分を抽出した。これが戒蘊品系の修行道の古い形式であったとして、それと類似した修行道を現存の資料中に見出すことができるであろうか。この点に

関して筆者は、中部系の修行道で最も用例が多い『中部』第27「小象跡喩経」に説かれる修行道の形式がそれに当てはまるのではないかと考える。両者の形式を表にしてみると表4ようになる。参考として『中部』第27「小象跡喩経」の相当経、及び中部系タイプBの代表である『中部』第39「大馬邑経」とその相当経の形式も示す。

＜表4＞修行道の古層の検討表

		戒蘊品系の古層	『中部』27「小象跡喩経」	『中阿含』146「象跡喩経」	『中部』39「大馬邑経」	『中阿含』182「馬邑経」
1	如来の出現	○	○	○	×	×
2	発心と出家	○	○	○	×	×
3	パーティモッカによる防護	×	×	○	×	×
4	小戒	○	○	○	慙愧を具える、身口意・生活清浄	身口意・生活清浄
*	衣鉢の携帯と知足	?	○	○		
5	中戒	○	×	×		
6	大戒	○	×	×		
7	安楽の経験	○	○	○	○	○
8	感官の防護	○	○	○	○	○
9	正念正知	○	○	○	適切な食事・覚醒の努力+○	○
10	五蓋の除去	○+比喩	○	○	○+比喩	○
11	四禪	○+比喩	○	○	○+比喩	○
12	三明	○+比喩	○	漏尽知のみ	○+比喩	漏尽知のみ
13	解脱・解脱智見	○	○	○	○	○

表を見ると、戒蘊品系の修行道の古層部分と『中部』第27「小象跡喩経」に説かれる修行道、つまり中部系タイプAの基本形式が戒蘊部分（4～6）と比喩の部分（10～12）を除いて一致することが分かる。戒蘊は戒蘊品系では小戒から大戒、中部系では小戒のみと明確に分かれていることから、中戒・大戒を含む戒蘊は戒蘊品系の修行道の特徴であると言える。比喩の挿入は基本的に中部系の修行道には見られない特徴であるから（『中部』第39「大馬邑経」の比喩は他の中部系の修行道には見られないし、相当漢訳経にはないから後世の挿入であろう）、これは戒蘊品系に特有なものと考えられる。戒蘊品系の古層と思われる部分から、戒蘊品系の修行道に特有と考えられる要素（中戒・大戒・比喩部分）を除くと、「衣鉢の携帯と知足」の項目のみは元来どこに位置したのか戒蘊品系の修行道との比較からは推定できないものの、ほとんど「小象跡喩経」に説かれている形式の修行道と同一になる。

『中阿含』「象跡喩経」は戒蘊の前に「パーティモッカによる防護」の項目があり、「三明」部分が漏尽知のみになっているものの、基本的には相当経である「小象跡喩経」に説かれる修行道の形式と共通点が多い。先にも述べた通りこの相違は部派的な編集作業に由来すると考えられるから、それを考慮に入れば、この形式が中部系の修行道の中で最も基本的な修行道と言えるのである。

一方、中部系タイプBである『中部』「大馬邑経」とその相当経である『中阿含』「馬邑経」の修行道を見ると、「小象跡喩経」と「象跡喩経」の場合と同じく、「三明」が漏尽知のみの形式で説かれるものの、「慙愧を具える」・「適切な食事」・「覚醒への努力」等の項目や比喩の有無の相違も見られ、修

行道の形式という点から見ると共通点よりも相違点の方が目立つ。これは中部系タイプBに大体共通して言えることかと思われる。このことから、より古形の形式を求めるという観点から見れば、中部系タイプBの修行道は一応除外するべきであろう。

そのように考えると、タイプAの形式のうち『中部』と『中阿含』のどちらがより古形かという問題になるが、戒蘊品系の修行道の古形との共通点の多さをもって、『中部』「小象跡喻経」の修行道の方が比較的古形を保っていると言えるのではないだろうか（この時点で戒蘊品系の修行道では位置が特定できなかった「衣鉢の携帯と知足」の項目は元来小戒の後に位置していたと推定できる）。「大戒」の後に位置する例（『寂志果経』）は、これが戒蘊を修めた後に獲得されるものであることが考慮に入れられた結果現存の形式になったのであろう。戒蘊品系の修行道の比較の結果と中部系の修行道の比較・分類から、これらの修行道の古形は『中部』第27「小象跡喻経」に見られるような修行道の形式に近かったであろうと推定できる。以下、『中部』「小象跡喻経」等に説かれる修行道を基本的な修行道と位置付け、これを「修行道の大綱」¹⁵（もしくは、単に「大綱」）と呼び、修行道発展の考察の起点とする。

II. 修行道の発展について

阿含・ニカーヤ中に説かれる修行道のうち、最も基本的な形式が修行道の大綱であるとする、これを基礎として、種々の修行道はどのように発展していったと考えられるであろうか。筆者はこの問題を検討するために、修行道の形式全体をいくつかの段階に区切る。先に論じた修行道の系統の分類をふまえると、修行道は以下のような段階に分けることが相応しいと思われる¹⁶。（その修行道に特有であると見なされる項目はここにはあげなかった）

①修行道の導入部分＝「如来の出現」・「発心と出家」・「回想」

②戒＝「パーティモッカによる防護」・「戒蘊（衣鉢の携帯と知足）」・「安楽の経験」・「身口意（・生活）清浄」

③定の準備段階＝「感官の防護」・「適切な食事」・「夜間の覚醒への努力」・「四念処」・「正念正知」・「五蓋の除去」

④定＝「四禅」・「九次第定」

⑤慧＝「智見」・「意所生身」・「三明」・「六神通」・「漏尽知」

⑥解脱＝「解脱・解脱智見」（心解脱と心解脱・慧解脱）

¹⁵ 「修行道の大綱」という言葉を最初に用いたのは宇井伯寿氏である。（宇井氏前掲書46頁）宇井氏は修行道の大綱を『『長部』「沙門果経」の修行道から外教的な要素を除いた、純仏教的な修道ルート』と考えているようである。

¹⁶ 南氏が前掲論文において用いた分類を参考にした。

以上の項目のうち、②④⑤が三学に、②④⑤⑥が五分法身に担当されることになる。①は具体的な修道項目ではなく、個々の経の内容によって改変されていることが明確であるから、修行道の発展の検討からは除外される。④については四禅の修習を内容とすることでほぼ一定している¹⁷。四禅が九次第定へと続く場合は④⑤⑥が説かれることがないため、九次第定をもってそれらに代えていることは明らかである¹⁸。残りの②③⑤⑥については発展が多少複雑であるので、以下に検討を加えることにする。

1. 「戒」の発展

出家者はまず彼らが守るべき「戒」を修めることになる。「戒蘊」に説かれている内容は一様ではないが、概ね倫理的な項目と生活規定、呪術的な行為に関する規定に分けられる。出家者はこれらの項目に説かれる事柄を守り、最終的に安楽を経験する。「戒」の段階の説示は大体4つの形式に分かれる。それは「戒蘊」と「安楽の経験」のみの場合（パーリ中部系タイプA）と、「パーティモッカによる防護」のみの場合（『中部』第53, 107, 125）、両者が並存している場合（『長部』「戒蘊品」・有部系『長阿含』「戒蘊品」・『中阿含』タイプA）、「身口意・生活清浄」等が説かれている場合（『中部』第39, 『中阿含』第65, 144, 182, 198, 『数経』）である。

（1）戒から律へ

戒蘊の「戒」（sīla）は√sīl（瞑想する、奉仕する、実行する）の語根に由来し、習慣性、傾向、生活などの意味を持ち、転じて「善い習慣性、善い行為、道徳的行為」等の意味に用いられる。戒は罰則を伴うパーティモッカとは性質が異なり、自発的な善を要求するものであって、パーティモッカとは内容的に共通点を持つものの¹⁹、両者の系統が別であることが指摘されている²⁰。

大綱の形式は最も素朴であるからこれを出発点として考えると、漢訳『長阿含』を除く戒蘊品系の修行道や『中阿含』タイプAの修行道では「戒蘊」の前に「パーティモッカによる防護」の記述が挿入され、パーリ中部系タイプBでは「パーティモッカによる防護」の記述のみでもって「戒蘊」・「安楽の経験」の修習を済ませてしまっている。とすると、元々「戒蘊」・「安楽の経験」のみで説かれていた形式に、別系統であるパーティモッカに関する記述が挿入されたか、あるいは「戒蘊」・「安楽の経験」にあたるものに代わり「パーティモッカによる防護」のみで「戒」の修習を済ませてしまうようになっていったと推測できる²¹。この流れは当然律蔵の発展とも関連があろうが、それは本論の範

¹⁷ 三学中の増上心学（adhicittasikkhā）も常に四禅で解釈されている。（AN. I, 235頁－236頁, Nidd. I, 39頁, 158頁, 『雑阿含経』〔『大正蔵』第2巻 210頁〕）

¹⁸ 想滅尽定で終了する修行道（『増支部』II）は、想滅を主題とする『長部』「戒蘊品」第8「ポッタパダ経」及び漢訳『長阿含』「第三分」「布吒婆楼経」の修行道にも見られるが、この改変は同系統内の差異であると思われる。

¹⁹ 山極氏前掲論文では、戒蘊の条項と律蔵の項目の対応について言及されている。

²⁰ 平川彰『原始仏教の教団組織 I』163頁－164頁参照。

²¹ 三学中の増上戒学（adhisīlasikkhā）は基本的に「パーティモッカによる防護」によって解説されるが（AN. I, 235頁－236頁, 『雑阿含経』〔『大正蔵』第2巻 210頁a〕, Nidd. I, 39頁, 158頁等）、『大義釈』にはさらに付加された解説がある。

困外である。ちなみにパーリ律中には「戒蘊」(sīlakkhandha) という語が何度か見られる²²。

(2) 戒蘊の古層の検討

修行道成立後のある時期から、戒蘊よりもパーティモッカが重んじられるようになったと考えられるのに対し、戒蘊は時間的にどれほど遡ることができるのであろうか。パーリ資料を見る限り、修行道以外に戒蘊が説かれている例は無いようであるから、戒蘊を修行道以前の成立と見ることはできない²³。

戒蘊の構成に目を向けると、戒蘊は小戒・中戒・大戒に分類でき、大綱は小戒部分のみで戒蘊と称する。小戒から大戒への説示形式を見ると、小戒は中戒や大戒と形式が異なっている。中戒と大戒の間にも若干相違が見られ、さらに小戒の中でも前半(表5 No.1~7)と後半(表5 No.8~26)では形式が異なる。中戒や大戒の部分は小戒と異なり、外教者の批判を通じて戒を示すところにその特徴がある。

これに関して諸テキストの小戒部分を比較してみると(次頁表5参照)、小戒の後半部分は資料によって順序も内容も異なるものの²⁴、小戒の冒頭部分の7項目は順序・内容共にほぼ共通していることが分かる。これは戒本来の倫理的な規定である小戒の冒頭部分が諸テキストに共通する戒蘊の基礎となっており、その上に戒の条項が付加され、改変され、個々の部派に特有な戒蘊ができ上がっていったことを示しているのであろう²⁵。

(3) 「身口意・生活清浄」の位置

以上、戒蘊の発展とパーティモッカへの移行について論じた。残りは「身口意・生活清浄」に対する位置付けの問題である。「身口意・生活清浄」を説く修行道を見ると、全て中部系タイプBに属する。これらの修行道のうち、『中部』では第39「大馬邑経」のみがこれを説くが、『中阿含』では大体「身口意・生活清浄」を説く。(『中阿含』第65,『数経』は「身口意清浄」を説くが、65は相当経が『中部』にないし、『数経』は参考程度にしか用いることができないから、この形式は例外と考える)このことから、漢パの修行道の比較からは、先述の「パーティモッカによる防護」以前に説かれていた「戒蘊にあたるもの」とはこの「身口意・生活清浄」ではなかったかという推測が成り立つのである。

これに関してまず注目される点は、大綱及び『長部』「戒蘊品」における戒蘊に関する記述である。大綱では戒蘊の説示が次のように始まる。

²² *Vin. I*, 63頁等。

²³ 偈には1例のみ用例が見られる。(Th. 第865偈)

²⁴ 『中阿含』と有部系『長阿含』は同じ有部系の所伝であるが、表を見る限り小戒の内容がかなり異なっている。この点で両者は全く同じ系統のテキストとは言えないように思われる。

²⁵ 『増支部』ではこの7つの戒を具えることを「戒具足」と呼ぶ場合がある。(AN. I, 269頁。勝本華蓮「十善業道という戒」を参照)

<表5>各資料における小戒相当部分の内容一覧

No.	パーリ資料	漢訳『長阿含経』 「阿摩昼経」	『梵網六十二見経』	『中阿含』 「象跡喻経」	有部系『長阿含経』 「戒蘊品」
1	不殺生戒	不殺生戒	不殺生戒	不殺生戒	不殺生戒
2	不与取戒	不与取戒	不与取戒	不与取戒	不与取戒
3	梵行戒	梵行戒	梵行戒	梵行戒	梵行戒
4	不妄語戒	不妄語戒	不妄語戒	不妄語戒	不妄語戒
5	不両舌戒	不両舌戒	不妄念・不両舌戒	不両舌戒	不両舌戒
6	不悪口戒	不悪口戒	不罵詈・不悪口戒	不悪口戒	不悪口戒
7	不綺語戒	不綺語戒		不綺語戒	不綺語戒
8	種子・草木の保護	酒を飲まない	立派な寝具を用いない	財貨等の世俗的な事柄からの遠離	暴力的行為の破棄
9	一食・非時食を守る	装飾品を用いない	装飾品を用いない	婦女を受用しない	女性と寝ない
10	娯楽等に参加しない	娯楽等に参加しない	娯楽等に参加しない	奴隷を受用しない	土地・家・経済的なものを受用しない
11	装飾品を用いない	立派な寝具を用いない	酒を飲まない	家畜を受用しない	鳥獣を受用しない
12	立派な寝具を用いない	非時食を守る	金銀珍宝を受け取らない	田畑や店舗を受用しない	男女奴隷・使用人を受用しない
13	金銀の受用をしない	金銀の受用をしない	非時食を守る	生の穀物を受用しない	男女・子供を受用しない
14	生の穀物を受用しない	婦人・少女を貯蓄しない	男女奴隷を受用しない	酒を飲まない	金銀を受用しない
15	生肉を受用しない	男女奴隷を貯蓄しない	米穀を受用しない	立派な寝具を用いない	生穀を受用しない
16	婦人・少女を受用しない	諸の鳥獣を貯蓄しない	諸の鳥獣を受用しない	装飾品を用いない	一食・非時食・適切な托鉢を守る
17	男女奴隷を受用しない	田畑・住宅を貯蓄しない	住居を所有しない	歌舞等を鑑賞しない	衣と食への満足(知足の達成)
18	山羊・羊を受用しない	園林を貯蓄しない	売買を行わない	きらびやかな像や宝を受用しない	衣鉢の携帯(飛ぶ鳥の譬え)
19	鶏・豚を受用しない	詐欺等を行わない	重量等をごまかさない	適切な食事・非時食を守る	
20	象・牛等を受用しない	暴力的行為を離れる	暴力的行為を行わない	戒の成就と知足の達成・衣鉢の携帯(飛ぶ鳥の譬え)	
21	耕地等を受用しない	借金をしない			
22	使者にならない	だましを行わない			
23	売買を行わない	悪・不善を離れる			
24	重量等のごまかしをしない	適切な行動をとる			
25	詐欺等を行わない	適切な食事をする			
26	暴力的行為を離れる	衣鉢への満足			
27		衣鉢の携帯(飛ぶ鳥の譬え)			

*「衣鉢の携帯と満足」が「小戒」の後に説かれる場合は戒蘊の一部としてここに挿入した。(パーリは別)

So evaṃ pabbajito samāno bhikkhūnaṃ sikkhā-sājīva-samāpanno pāṇātipātaṃ pahāya pāṇātipātā paṭivirato hoti. (MN. I, 179頁)

<和訳>

彼はこのように出家して、比丘達の学処と生活規定を具えつつ、殺生を捨てて、殺生から離れている²⁶。

註釈によれば、「学」(sikkhā)とは「増上戒」(adhisīla)のことであり、「生活規定」(sājīva)とは「世尊によって設けられた戒律条項(sikkhāpada)を言う」とある²⁷。この場合、戒蘊はパーティモックとも関連するような生活に関する規定であると解されている。

²⁶ 『長部』・『中部』の引用の和訳に関しては中村元監修『原始仏典』及び片山一良訳『パーリ仏典』を参照しつつ訳した。

²⁷ Ps. II, 205頁。また平川彰『律蔵の研究 I』177頁を参照。

次に、『長部』「戒蘊品」の修行道には「パーティモッカによる防護」の記述の後に、『長部』「戒蘊品」に特徴的な次の文言が見られる。

kāya-kamma-vaci-kammena samannāgato kusalena parisuddhājivo sila-sampanno indriyesu gutta-dvāro sati-sampajaññaena samannāgato santuṭṭho. (*DN. I*, 63頁)

<和訳>

(彼は) 善い身口の行いを具えて、生活は清らかである。戒を具え、諸根の門を守り、正念正知を具足し、満足する。

このうち「善い身口の行いを具えて、生活は清らかである」とは、明らかに身業・口業と生活の清浄のことを指していると考えられる。この後の「戒を具え、～」の部分は「戒蘊」・「感官の防護」・「正念正知」・「衣鉢の携帯と知足」の項目の要点を前もって説明している部分であるから、「戒蘊」以下の項目はこの「身口・生活清浄」を達成するために行われると解釈できる。

さらに「身口・生活清浄」とこれらの要点の関係を検討してみると、『長部』「沙門果経」には修行道の前に釈尊によって出家者の果報として2つの例が説かれており、そのいずれにも以下のような記述が見られる。

So evaṃ pabbajito samāno kāyena saṃvuto vihareyya vācāya saṃvuto vihareyya manasā saṃvuto vihareyya ghāsacchādāna-paramatāya santuṭṭho abhirato paviveke. (*DN. I*, 60頁, 61頁)

<和訳>

彼はこのように出家して身体を防護して住し、言葉を防護して住し、心を防護して住し、(与えられた) 食べ物と衣服を最上のものとして満足し、遠離を大いに喜ぶとしましょう。

上の引用文には出家の果報として、身口意の悪しき行為を防いで浄化し、他人から与えられるものに満足する(以下「身口意の防護と満足」ということが記述されている。この部分は資料によって相違が大きいので²⁸、後代の解釈を反映しているのであろう。

ところで、ここの「満足する」(santuṭṭha) という語は先の引用の「満足」の語と同一である。そしてその「満足する」ことを要約とする『長部』「沙門果経」中の「衣鉢の携帯と知足」の項目は、他の資料と異なり「正念正知」の後に位置し、『長部』特有の位置に説かれている。これはおそらく、『長

²⁸ 漢訳『長阿含』「沙門果経」には「行平等法」(『大正蔵』第1巻 109頁b) とあるのみで具体的な修行については言及しない。『根本説一切有部律』「破僧事」に引用される『沙門果経』には十善業道にあたるものが見られる。(SBV. II, 228頁) この点は『寂志果経』も同じである。(『大正蔵』第1巻 272頁b) 『増一阿含経』の相当部分には特に修道的な記述は無い。

部』の編集者が「衣鉢の携帯と知足」を「小戒」の後からこの位置に移すことによって、「満足」という語を修行道の前に説かれる例えと関連させ、それと比較して修行道がより勝れた果報をもたらすものであることを強調しているのであろう。このことは、「四禪」以降の項目それぞれに『長部』に特徴的な記述として「大王よ、これもまた前の目に見える沙門の果報よりもさらに優れ、すばらしい目に見える沙門の果報なのです」²⁹等の文言が付加されていることから理解できる³⁰。とすると、この文言がない「戒蘊」から「衣鉢の携帯と満足」の項目までが『長部』の編集者の考える「身口意の防護と満足」よりも優れた「身口・生活清浄」に対応する部分と見てよいであろう³¹。

また『長部』・『長阿含』に説かれる修行道の大戒部分では、沙門・バラモン達が占い・予知予測・呪術等によって生活することを「邪な生活」(micchā-ājīva)と呼んでいる。これは外教の沙門・バラモン達の生活に対する批判を通して、出家沙門のあるべき生活を規定しているのであろう。

さらにこの点に関して、『スッタニパータ』中の「出家経」には次のような偈が見られる。

Sambādhō 'yaṃ gharāvāso rajassāyatanam' iti
abbhokāso ca pabbajjā' itī disvāna pabbaji, (*Sn*.406)
pabbajitvāna kāyena pāpakammaṃ vivajjayi,
vacīduccaritaṃ hitvā ājīvaṃ parisodhayi. (*Sn*.407)

<和訳>

(眼ある方は)「家庭(生活)は煩わしく不浄なところである

出家(生活)は野外(のように清浄)である」と見て出家された

出家して身による悪行を棄てられた

ことばによる悪行をも棄てて、生活を清められた

前半の偈は修行道の中の「発心と出家」の部分とパラレルであり³²、後半の偈は先述した「身口・生活清浄」の引用と直接関連している。「出家経」は『根本説一切有部律』『破僧事』にも引用される³³。修行道の一要素である出家の決意の部分と出家後の修道の要素が互いに一致することから、修行

²⁹ Idam pi kho mahā-rāja sandiṭṭhikaṃ sāmāñña-phalaṃ purimehi sandiṭṭhikehi sāmāñña-phalehi abhikkantataraṇ ca paṇitatarā ca. (*DN*. I, 74頁等)

³⁰ この記述は『長部』「沙門果経」以外にはない。

³¹ 田中教照氏は、大綱の形式から戒を大幅に付加し、戒蘊の性格を変えてしまったことが『長部』「戒蘊品」の「衣鉢の携帯と知足」の移動の原因であると論じているが(田中氏前掲書191頁)、他の戒蘊品系の修行道のようにそれを移さないことや大戒の後に移すことも選択肢に入るはずであるから、中戒・大戒の付加によって戒蘊が外教批判の性格を帯びるようになったとしても、それが『長部』の改変の原因であると見ることはできない。ただし筆者の見解も、「沙門果経」の都合で『長部』全体の修行道の形式が改められたのか、同品のその後の修行道がこれと同じ形式で説かれることが有り得たのかについては問題が残る。

³² Sambādhō gharāvāso rajo-patho, abbhokāso pabbajjā. (*DN*. I, 63頁, *MN*. I, 179頁)

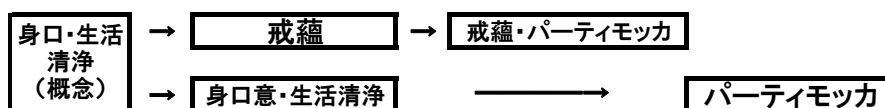
³³ 村上真実・川真貞『仏のことば註』第3巻の本偈に対する注を参照。

道の「戒」の部分が、元来出家した者の身体的・言語的行為と生活の浄化を目的としていたと理解できるのである。

以上、『長部』・『中部』に説かれる修行道には「身口・生活清浄」に関連する記述が見出せ、「戒蘊」等の項目が身体的・言語的行為及び生活を清める目的で修められていることが明らかになった。しかしこれらは「身口意・生活清浄」と「戒蘊」・「安楽の経験」との共通性を示しているものの、直接的な先後関係を明らかにできるほど関連性が高いわけではない。故に両者の関係はあくまで外延的なものであったと考えるのが妥当である³⁴。では、この両者はどのような点で関連するのであろうか。筆者はこの点について、修行道の形式の比較からは「戒蘊」と「身口意・生活清浄」の先後関係は不明であるものの、両者に共通する背景が「身口・生活清浄」であったと考えたい。漢パの修行道に「身口意・生活清浄」を説くものが一定数あることは確かなのであるから、これを「戒」の発展から除外するわけにはいかない。「戒蘊」と「身口意・生活清浄」が「身口・生活清浄」という共通概念を元に成立したと考えれば、「戒」の発展に関する一応の道筋が明らかになるのではないだろうか³⁵。

このように各項目やそれに関連すると思われる部分を検討すると、修行道における「戒」の元来の目的とは、出家者の行為、特に身体的・言語的行為と生活を整え、心に相即する身体的側面の清浄を獲得することにあつたと言える。身体的な清浄を獲得することは最終的に智慧を獲得するのに必要な禪定の基礎となるものであり、次の「定の準備段階」の基礎でもある。そしてこの目的から大きく外れない限り、「戒」は様々な解釈や実際の出家生活に即した発展を許容する可能性を有していたのであろう。その結果として、「パーティモッカによる防護」や「身口意・生活清浄」のように、それとは若干性質を異にする項目も説かれるなど、修道に関して多様な解釈がなされていったと考えられる。以上の検討を踏まえると、「戒」の発展は以下のようなようになるであろう。

<図1>戒の発展



2. 「定の準備段階」の発展

「戒」の修習によって修行者の身口の行為や生活を浄化した後は、禪定を修するための準備段階に入ることになる。「定の準備段階」は大体3種類に分類できるが、基本的な項目を全く説かず四禪に

³⁴ Bucknell氏は三業に八正道中の正語・正業・正命の要素が加味され、「身口意・生活清浄」が成立したと論じている。(Bucknell氏前掲論文18頁-19頁)

³⁵ 田中教照氏は「小象跡喩経」の形式を本来のものとし、「身口意・生活清浄」を観念論的行動論が錯綜した不自然な階梯という見方をしている。(田中氏前掲書176頁)

移っている例（『中部』第198）や、別の項目を挿入している例（『中部』第53）など、大綱の形式とは異なる修行道が多いので、他の段階と比較して最も多様な発展をしたと考えられる。このような例はその修行道に特有なものが多く、個々の経の目的に応じて基本的な形式を改めたのであろう。

大綱の形式を基本に見ると、『長部』「戒蘊品」・有部系『長阿含』「戒蘊品」、漢パの中部系タイプAは修行道の大綱と同じく「感官の防護」・「正念正知」・「五蓋の除去」を説き、『中部』第125「調御地経」とその相当経である『中阿含』第198「調御地経」を除く中部系タイプBは「感官の防護」の後に「適切な食事」・「覚醒への努力」を挿入し、漢訳『長阿含』「第三分」と漢パの「調御地経」はこれらの項目のいずれかの箇所「四念処」を挿入するという形式になっている。単純に考えれば、付加されている項目が多いものほど発展段階としては後のものになると思われる。

（1）「感官の防護」・「正念正知」・「五蓋の除去」の形式

まずは基本と思われる大綱の形式を見る。この形式は戒蘊品系と中部系タイプAに大体共通して見られるもので、項目の内容を一覧すると、「感官の防護」とは六根を防護して貪欲等の不善法が流れ込まないようにすること、「正念正知」とは常住坐臥に注意を怠らないこと、「五蓋の除去」とは四禪を修める直接の準備作業として、森林等で結跏趺坐し、心を覆い善法が生じるのを妨害する五蓋を除くことである。これらの項目を順次修めることによって、修行者は初めて「定」、具体的には四禪を修め、心を浄化させることが可能になる。

以上の項目の内容を見ると、総じて心理的な側面が扱われていることが分かる。これは先の「戒」での部分で浄化されなかった意業に関する修養と解釈できるから、大綱の形式のみでその意図が十分理解でき、他の形式は大綱に何らかの要素を付加したものであると言える。それ故に、大綱の形式に付加された項目を検討することによって、「定の準備段階」の性格がより明らかになると考えられる。

（2）「適切な食事」・「覚醒への努力」・「四念処」の挿入

「適切な食事」・「覚醒への努力」の挿入はパーリ中部系タイプB及び漢訳『長阿含』等の修行道に見られる³⁶。田中教照氏はこの「適切な食事」・「覚醒への努力」の挿入について論じており、筆者は基本的にその見解に賛成したいと思う。よってここでは田中氏の見解の要点をふまえ、そこに筆者の見解を加えて考察に代えたい。

まず「適切な食事」の項目は食事に対する心構えを内容としており、食事に関しては「小戒」部分に「一日一食」・「非時食」等の規定があるし、「正念正知」においても「食べる時も、飲む時も、嘔む時も、飲み込む時も正知をもって行動する」³⁷とあるように、修行道の中でも重要視されている。「感官の防護」の後に食事に関する事柄を挿入するのは、この項目に「以前の感受を断ち、新しい感受が

³⁶ 「感官の防護」の後に「適切な食事」や「覚醒への努力」を説く例は、修行道以外にもパーリ資料に見受けられる。（SN. IV, 103頁－105頁, 105頁－107頁, AN. I, 113頁－114頁, II, 39頁－40頁）この点は金児黙存「原始仏教に於ける戒の根源的意義」が指摘している。

³⁷ asite pīte khāyite sāyite sampajānakāri hoti (MN. I, 181頁)

生じないように」³⁸と説明されているように、「感官の防護」と共通する目的があるためである。これは次の「覚醒への努力」とも関連していて、修定には重要なことだったのであろう。つまり、食事を摂る量を適切にしないと満腹感で眠くなったり、空腹で心が落ち着かないために、十分に定を修することができなかつたためであると考えられる。「覚醒への努力」は「適切な食事」との関係に加え、定を修めるにあたっての実修的な方法を示しているのであろう。これはすべての比丘が実修していればここにわざわざ説く必要のないはずの内容であるが、「正念正知」の項目をより詳しく示した、と言うこともできる。(以上、田中氏の見解の要約)³⁹

「覚醒への努力」の項目は、要するに初夜から後夜にかけてできるだけ寝ずに覚醒しているように努めるという内容である。これは中夜に横になる際にも「正念正知があり」⁴⁰とあるように、「正念正知」の項目と密接に関連している。

田中氏の見解を元にこれらの項目を考察すると、「適切な食事」・「覚醒への努力」はいずれも「感官の防護」・「正念正知」の補足的な内容であることが分かる。実際の修行生活にあっては食事と睡眠は重要な事柄であるから、これらが適切に行われなくては修行の完成は見えてこない。それ故に大綱の形式が成立した後に、特に注意すべき項目としてここに立てられたのであろう。

残りの「四念処」の項目は漢訳『長阿含』と漢パの「調御地経」に見られるが、挿入される位置はまちまちであり、そこに説かれている「定の準備段階」にあたる項目も全く異なっている。漢パの「調御地経」の修行道は大綱の形式とかなり相違しており、両者の「定の準備段階」の部分にも共通点が見出せない。このことから、むしろ「四念処」の挿入は「定の準備段階」の発展の中で考察されるものではなく、『中部』第53「有学経」に説かれる「七正法」と同じく、個々の修行道の解釈によって改変されたと考える方がよいと思われる。いずれにせよ大綱の形式がある程度発展した後の解釈であろう。

これに関して四念処は「正念正知」と関連することが指摘できる。『長部』「戒蘊品」の修行道では「正念正知」の冒頭で「どのように正念正知を具足しているのか」⁴¹と前置きしているにも関わらず、その後には正知に関する記述しかない。正念に関する部分はなぜ説かれていないのか。註釈は正知には既に正念が結びついているという解釈をしているものの⁴²、正念が何を意味するのかについては何も言及していない。修行道以外の部分でこの文脈の用例を調べると、四念処に関する経の身不浄観の

³⁸ purāṇaṃ ca vedanaṃ paṭihāṅkhāmi navaṇaṃ ca vedanaṃ na uppādessāmi. (*MN. I*, 355頁)

³⁹ 田中氏前掲書176頁－178頁。

⁴⁰ sato sampajāno (*MN. I*, 355頁)

⁴¹ Kathaṇaṃ ca mahā-rāja bhikkhu sati-sampajaññaṇa samannāgato hoti? (*DN. I*, 70頁)

⁴² *Evaṃ kho Mahārāja* ti, evaṃ sati-sampayuttass' eva sampajaññaṇassa vasena abhikkhamādini pavattento sati-sampajaññaṇa samannāgato nāma hotīti attho. (*Sv. I*, 203頁－204頁)

<和訳>

「大王よ、このように比丘は～」とは、このように正念と相応した(結び付けられた)正知の力により「進む」等(の行動)を行いつつある者が正念正知を具足しているという意味である。

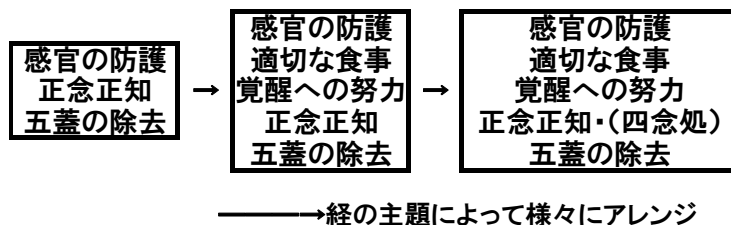
中にこの記述が見られる⁴³。また『長部』第16「大般涅槃經」は正念正知を説く際に、正念を四念処で、正知を修行道の「正念正知」で説明している⁴⁴。『相応部』にも正念正知を説明する際に同様の説明をしている例が見られる⁴⁵。

ニカーヤの用例を見る限り「正念正知」は四念処との関係が深く、特にその中の正念は四念処そのものであるとする解釈が見られる。正知に関しては四念処中の身不淨觀との関連が指摘でき、感受・心・法を除いた具体的な行動についての正知という意味のようである。一般に四念処は禪定的な要素が強いから、大綱が成立した後に、編集者によって「定」や「定の準備段階」の部分に挿入されることに問題はないと解釈されたのであろう。

以上、「定の準備段階」の項目の検討を行った。大綱の形式はいずれも内面的な心の問題を扱っており、「戒」で浄化した身体的、言語的行為や生活との関連が指摘できる。このような大綱の形式に、後に「適切な食事」・「覚醒への努力」が付加されるようになる。この二つの項目には「感官の防護」・「正念正知」の補足的な意味合いがあり、食事と睡眠という実際の出家生活において重要な事柄について、後に項目として挿入されたのであろう。一方「四念処」の挿入は「適切な食事」・「覚醒への努力」よりもさらに後の付加であり、「正念正知」との関連性が指摘できる。「五蓋の除去」は「適切な食事」・「覚醒への努力」等との直接的な関連が見られない。このことから、逆にこの項目が四禪の修習の直接的な条件として位置付けられていると言えるのである。

「定の準備段階」全体の発展を見ると、大綱の形式が最も古く、次に「適切な食事」・「覚醒への努力」が挿入されるようになり、さらに遅れて「四念処」が付加されるようになったと推定できる。しかし「定の準備段階」には種々の例外的な形式があり、一概に発展経路を確定できない面がある。これは南氏の言うように⁴⁶、これらの項目が「戒」の段階と同じく実際の修行に関わる事柄であって、出家生活及び修道に対する考え方の変化等によって様々に変容する可能性を有していたためであると考えられる。以上の検討を踏まえると、「定の準備段階」の発展は以下のようにまとめられる。

<図2> 定の準備段階の発展



⁴³ DN. II, 29頁, MN. I, 57頁, III, 90頁。

⁴⁴ DN. II, 94頁—95頁。

⁴⁵ SN. V, 142頁。

⁴⁶ 南氏前掲論文107頁。

3. 「慧」、「解脱」の発展

「慧」と「解脱」の段階は便宜上併せて検討することにする。四禪を修めた後、出家者は解脱するための直接的な因となる智慧を獲得し、それにより解脱し、解脱したということを知る。「慧」は「三明」・「六神通」・「漏尽知」のグループとその他の「智見」・「意所成身」に大別でき、「解脱」には「心解脱」と「心解脱・慧解脱」の形式が見られる。

(1) 三明から六神通へ

まず大綱の形式は三明であるが、三明と六神通の関係に関して、三明から六神通への変化を神足通・天耳通・他心通の付加と考えれば、三明が時間を経て発展したものが六神通であると考えられる。このような超人的な超能力の行使は積尊によって誠められたとされているから⁴⁷、六神通の説示は修行道本来の目的からは外れるかもしれないが、仏道修行の結果得られる智慧の優位性を主張するという効果があることは確かであろう。

さて、三明の成立に関して中村元氏は『相応部』「バラモン相応」の偈を引用し、仏教の三明がバラモン教の三ヴェーダに由来することを指摘し、仏教側がバラモン教の三明を批判しその呼び名を取り入れた上で宿明知・天眼知・漏尽知の三明を宣言し、そこに神足通・天耳通・他心通が加わり、六神通が成立したと論じている⁴⁸。これについて批判的な見方をする主張は見られないので、三明から六神通が成立したことは認めてもよいであろう。そして、時間的に見れば三明は六神通よりも先行することは明らかである。

(2) 「智見」・「意所成身」の位置

次に「智見」と「意所成身」の項目について述べる。「智見」は自身の身体を無常と見ること、「意所成身」は無常であるような身体とは別の、意から成る完全な身体を創造することであるが、これらの記述の意味合いや修習の目的を含めて、なぜこの部分が四禪と六神通の間にあるのかは目下のところ不明とせざるをえない⁴⁹。

しかしこれを修する目的が不明であるとはいえ、それが後に挿入されたものであると言うことは可能である。表1に明らかなように、有部系『長阿含』では「智見」と「意所成身」は説かれず、漢訳『長阿含』「第三分」では両者の順序が逆になっていることから、「智見」・「意所成身」は戒蘊品系の修行道の中でも確定的な項目ではなかったと言える。また、修行道を説かない『中部』第77「大サクルダーイ経」は、三十七菩提分法や八解脱、八勝処、十遍処等、ある程度後代の分類法と思われるものと共に比喻を含めた「四禪」・「智見」・「意所成身」・「六神通」を説いている⁵⁰。「智見」・「意所成身」を説く経は、パーリ資料中では『長部』「戒蘊品」の修行道と「大サクルダーイ経」を除いては

⁴⁷ DN, I, 211頁。

⁴⁸ 中村元『原始仏教の思想 I』47頁－53頁。

⁴⁹ 「智見」・「意所成身」の文脈は『梵網経』の断滅論第1, 3見と共通性を持つ。(DN, I, 39頁)

⁵⁰ 相当漢訳である『中阿含』第207「箭毛経」にはこれらの項目は説かれていない。

見られないようであり、元々「四禪」から「三明」・「六神通」等へと至る形式に、後世「智見」と「意所成身」が挿入されたと推定できるのである。

(3) 「三明」と「漏尽知」の先後関係

「六神通」や「智見」・「意所成身」が比較的発展の推移を推定し易いものに対して、三明と漏尽知の先後関係は問題点を有する。漏尽知は四諦の観察を核としているから、漏尽知が三明の一部であるからといって直ちに漏尽知が三明の後に説かれるようになったとは言えない。『中部』の修行道では三明が基本となるが、『中阿含』では「漏尽知」と「六神通」のみが説かれ、逆に三明を説く修行道が見られない。これは部派的な考え方が反映されているのであろうが、漏尽知のみをもって解脱に移る形式はパーリ資料にも見られるから（『中部』第112, 『増支部』Ⅱ）、修行道の比較からは「漏尽知」が「三明」の前段階であるのかどうか、あるいは「漏尽知」は「三明」よりも後の形式であるのかどうかは決定できないのである。

この点に関して中村氏の三明成立説を受け、三ヴェーダ批判として生まれた三明が以後どのように発展していったのかを論じたのが榎本文雄氏である⁵¹。榎本氏は三明の発展に関して、それが『相應部』「バラモン相應」の偈に見られるバラモン批判に始まり、この段階では漏尽知にあたるものは散文の三明に説かれる四諦の観察や漏の消滅等ではなく、「再生の消滅に達したと知って」⁵²いることであると指摘している。そして榎本氏は散文の漏尽知部分を引用した後で、韻文中の三明と散文中の三明に関して次のように述べる。

ここでは、SN.7.1.8以来の「再生の消滅に達したと知る (jātikkhayaṃ patto abhiññā)」という表現は、漏尽知によって得られる解脱知「再生は尽きた……と知る (khīṇā jāti…abhiññā)」の中に収められている。他方、韻文の三明には存在しなかった要素として、四聖諦やāsrava (漏、āsava) の消滅という概念が登場し、そのために第三知はāsravaの消滅が主題となり、しかもそれが第三知の名称にまでなっている。

このようにして、第三知は漏尽知として再定義され、これ以後変わることはない。しかし、韻文の三明では「再生の消滅を知る」ことが第三知として確立されていた。仮に、散文經典の三明が韻文經典の三明よりも古くから存在したならば、漏尽知、すなわちāsravaの消滅が韻文三明の第三知に置かれていたはずである。しかし韻文三明にはāsravaは全く言及されていない。

では、韻文三明を踏まえて散文三明が形成されたのなら、なぜ第三知にāsravaの消滅が登場してきたのであろうか。それは、韻文三明における第一知、第二知と第三知との間に横たわる修行道上の飛躍を散文經典の作者が埋めようとしたからではなかろうか。韻文三明においても、散文三明においても第一知、第二知は輪廻ならびにその原因を自覚することに他ならない。他方、韻

⁵¹ 榎本文雄「初期仏教における三明の展開」を参照。

⁵² atho jātikkhayaṃ patto abhiññā (SN. I, 167頁, Dh. 423, Sn. 647の偈の一部)

文の三明は一転して輪廻からの解脱知となる。この飛躍を解消するために、輪廻の要因であり、それが消滅する時に解脱が達成されるもの、すなわちāsravaがここに導入されたと考えられるのである⁵³。

榎本氏の見解によれば、韻文三明から散文三明が成立し、その際第三知において漏が修行道上の飛躍を埋め合わせるために使用され、そこに四諦観察の記述が挿入されることによって、第三知が漏尽知として再定義されたということになる。

榎本氏の解釈は散文の修行道部分に限って検討している筆者にとって指標を与えてくれる。三明が元来三ヴェーダに対応する形で成立し、漏尽知が元来解脱に達したことを知る智慧であるのならば、苦と漏に関する四諦を觀察する「漏尽知」のみをもって「慧」の項目とする解釈は、「三明」の漏尽知部分を抽出したものであるということになり、従って「漏尽知」の形式が「三明」よりも時間的に先に位置することは有り得ないことになる。榎本氏には批判対象があり、単純にこの見解を「三明」と「漏尽知」の先後関係に適用することはできないが、このように考えれば「慧」の発展に関しての見通しが立つのではないかと考える。

(4) 「心解脱」と「心解脱・慧解脱」

上掲の榎本氏の見解に見られるように、「解脱」の項目は漏尽知と関わりが深い。修行道の形式を比較すると、ほとんどの修行道において漏尽知によって心が解脱し（心解脱）、解脱したという智が生じると「心解脱」を説いている。例外として、『中部』第53（タイプB）が宿命知・天眼知を説いた後に漏尽知を説かずにそのまま「漏が減することにより、漏の汚れの無い心の解脱（心解脱）・慧による解脱（慧解脱）を現世において自ら知り、達成し、住します」⁵⁴とし、「心解脱・慧解脱」を説く。この記述は先にあげた『中阿含』にパラレルの記述がない『中部』第77「大サクルダーイ経」の六神通に説かれる漏尽知の部分とも大体一致する⁵⁵。つまりこの場合、三明や六神通中の漏尽知とは「心解脱・慧解脱」のことを示していることになり、「三明」中の漏尽知よりも発展した形式であることになる。また、「漏尽知」の形式は『中部』第38「大愛尽経」ではさらに特殊化し、ここでは「慧」の修習に代わって「心解脱・慧解脱」が説かれている。この形式は「慧」の項目自体を省略したものとも解釈できるが、修行道の発展より考えて「漏尽知」の変容と見るべきであろう⁵⁶。以上のように修行道における「慧」の修習の展開から見れば、「心解脱・慧解脱」の形式は明らかに「心解脱」の形式よ

⁵³ 榎本氏前掲論文72頁。

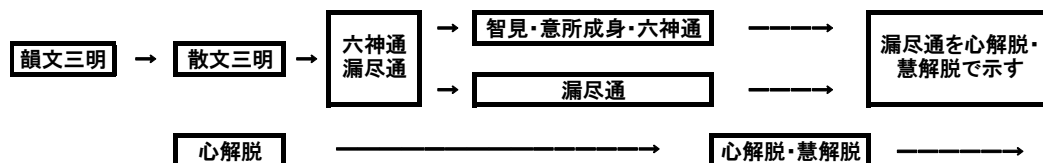
⁵⁴ āgamma āsavānaṃ khayā anāsavaṃ cetovimuttiṃ paññāvimuttiṃ diṭṭhe va dhamme sayaṃ abhiññā sacchikatvā upasampajja viharati. (MN. I, 357頁－358頁)

⁵⁵ MN. II, 22頁。

⁵⁶ 三学中の増上慧学 (adhipaññāsikkhā) の解釈は①四諦を觀察すること (AN. I, 235頁, 『雑阿含経』 [『大正蔵』第2巻210頁b-c])、②心解脱・慧解脱 (AN. I, 236頁)、③苦と漏の四諦を觀察すること (Nidd. I, 39頁) に分類できる。四諦の觀察を漏尽知の一部と考えれば、いずれも修行道中にそれを見出すことができる。

りも時間的に後に位置することが確認できるのである⁵⁷。以上の検討を踏まえると、「慧」・「解脱」・「解脱智見」は以下のような発展を経たと考えられる。

＜図3＞慧・解脱・解脱智見の発展



以上、修行道の形式を段階的に区切り、その発展を考察した。これにより個々の経に説かれる修行道が大綱の形式を基礎として成立し、そこに様々な解釈がなされて発展していったことが明らかになったのではないかと思う。

Ⅲ. 総括と結論

本論では三学の詳説たる修行道の系統を戒蘊品系と中部系に分類し、中部系をさらにAB両タイプに分類した上で、修行道における個々の段階を発展史的に検討した。

戒蘊品系の修行道は相互に共通性が低い後の編集によって付加されたと思われる要素と、共通性が高い元来の修行道に存したと思われる要素に大体分類することができる。筆者は後者を戒蘊品系の修行道の古形と推定した。一方中部系の修行道を分類すると、タイプAの修行道は基本的にその形式が統一されており、改変を蒙っている場合もそれが経の主題によって改められていると考えられる。タイプBの修行道は相互に比較しても同一の形式が見出せず、漢パの形式も大きく異なっている。よってより古形の修行道を設定するという目的からはタイプBは除外されることになる。

戒蘊品系と中部系の修行道の検討をふまえて、両者のより古形と思われる形式に一致する要素が最も多い『中部』第27「小象跡喻経」に説かれている修行道を修行道全体の基本形式と措定し、これを「修行道の大綱」と呼ぶことにした。

次に修行道の内容を「修行道の導入部分」「戒」「定の準備段階」「定」「慧」「解脱」・「解脱智見」等に区切り、大綱の形式を基準に、それらのいくつかに対して検討を加えた。その中で重要と思われる点を示すと以下ようになる。

①「戒」の段階では時間の経過と共に「戒蘊」に「パーティモッカによる防護」の要素が付加され、

⁵⁷ 舟橋一哉氏も心解脱のみの形式が心解脱・慧解脱の形式に先行することを指摘している。『原始仏教思想の研究－縁起の構造と実践－』205頁－228頁）

言わば戒から律への転換が起こっている。

②「戒蘊」の目的は身体的・言語的行為や生活を浄化させることにあり、それとは別系統と思われる「身口意・生活清浄」も、同じくこの目的を背景に成立していると推測される。

③「定の準備段階」の目的は「戒」の段階では清められなかった意業を修養することにある。この段階の項目はいずれも身体に相即する心理的な側面を扱っており、補足的に食事や睡眠に関する項目も見られる。修行者はこの段階を踏むことにより、意業の浄化の段階である「定」以降の修習に入ることができると考えたのであろう。この段階は修行道によって様々な形式があり、単純な発展を経たとは言にくい。

④「定」は四禪の修習ではほぼ一定しており、三学中の増上心学の解釈にも揺れがない。

⑤「慧」の発展は漏尽知の位置付けによって解釈が分かれる。筆者は漏尽知のみをもって解脱に至る形式が三明よりも後のものであると推定した。これは榎本氏の見解に依った。経の編集者は三明の要点を抽出して漏尽知のみとしたか、あるいはこれをもって直ちに解脱に至ると考えたのであろう。また修行道の形式を見る限り、少数ではあるが前二明・五通の直後に「心解脱・慧解脱」を説く形式や、四禪の修習の直後に「心解脱・慧解脱」に至る形式があり、これは「心解脱・慧解脱」を「漏尽知」と同一視した結果であると考えられる。

以上のような検討をふまえてパーリ資料中の修行道の発展を見ると、大綱の形式を基本として、個々の経に説かれる修行道が様々な発展を経ていることが分かる。特に『長部』『戒蘊品』の修行道はその最たるものの一つである。その相違点は、①戒蘊が大きく増広されていること、②「衣鉢の携帯と知足」の位置が移されていること、③比喩の挿入があること⁵⁸、④「智見」「意所成身」が挿入されること、⑤三明が六神通に発展していることである。

『長部』『戒蘊品』とその相当資料はその品自体が修行道を大きな特徴としている。そして、それと共に「戒蘊品」の目的が通常言われるように仏教が外教よりも優れていることを示すためにあるとするならば⁵⁹、当然修行道もそれに順ずる形で発展したと考えるのが自然である。そして①の戒蘊の増広、及び⑤の六神通への発展については、戒蘊の性格を変化させ三明に神通力を付加することによって、バラモン教や六師に代表される外教思想に対して仏教側がより優れていることを示す目的があったと考えられる⁶⁰。このことから、②の「衣鉢の携帯と知足」の移動もこの傾向に沿った改変と考えることができよう。

⁵⁸ 田中氏は比喩の挿入の理由に関しても論じている。(田中氏前掲書192頁)

⁵⁹ 宇井伯寿氏「原始佛教資料論」(『印度哲学研究』第2巻) 145頁、赤沼智善『仏教経典史論』179頁-181頁、前田氏前掲書619頁-625頁。

⁶⁰ 平岡聡氏は仏教の逆縁者に対する神通力の行使が、その最も正統的な使用方法であると結論している。(「神通/神変の効能と使用上の注意」) これは説話文献に関する検討の結果であるが、「戒蘊品」が対外的な性格をもっていたことは明らかであると考えられるから、この点で通底していると言えよう。

一方で『長部』『戒蘊品』の相当資料を見ると、修行道の形式は資料によって相違しているから、現存の『長部』『戒蘊品』中の修行道の形式はあくまで一部派の解釈の結果であるということが分かる。このように個々の戒蘊品系の修行道が何故このような形式であるのかは『長部』・『長阿含』の編集方針にも関わってくる問題でもあるのであるから、修行道の比較検討のみでは戒蘊品系の修行道の発展を論じ切れないことを考慮に入れなければならない。しかし戒蘊品系の修行道が外教批判及び外教超越という性格を有していることは「戒蘊品」等の性格から言っても肯首できるのではないだろうか。

以上、三学の詳説たる修行道の発展に関して考察を加えた。三学がいつ頃成立したのか明らかではないものの、考えの方、つまり思想自体は修行道の成立前に既に存したであろう。修行道はある時期から三学の詳説として説かれるようになった⁶¹。その原形は資料比較から見る限り、大綱の形式がそれに相応しいと思われるが、後に様々な要素が付加され、あるいは改変されるようになり、経蔵形成の末期になると、その基本的な形式を保たなくなるという流れが見て取れる。

以上のように修行道の発展を考察すると、三学、つまり仏道修行の綱要の捉え方の変遷が浮き彫りになってくる。このことは、本論で発展を考察した修行道自体が、三学の発展の中の現れの一つでしかなかった、ということを示しているのであろう⁶²。

略号表

*パーリ文献はすべてPali Text Societyのものを用いた。

『大正蔵』 = 『大正新脩大蔵経』

SBV. = *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu*, edited by Raniero Gnoli, part 2, Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1978. (梵文『根本説一切有部律』『破僧事』)

AN. = *Aṅguttara-nikāya*, 6vols., rep. 1961.

Dhp. = *Dhammapada*, New edition, rep. 2003.

DN. = *Dīgha-nikāya*, 3vols, rep. 1975.

MN. = *Majjhima-nikāya*, 4vols., rep. 1993.

Nidd I. = *Mahā-niddesa*, rep. 1978.

Pp. = *Puggalapaññatti*, rep. 1972.

Ps. = *Papañcasūdanī (Majjhima-nikāya-aṭṭhakathā)* 5vols., rep. 1979.

SN. = *Samyutta-nikāya*, 6vols., rep. 1973.

Sn. = *Suttanipāta*, New edition, rep. 1997.

⁶¹ 前田恵学氏は八正道から三学への発展が釈尊45年の説法の中で起こったものであると論じている。(『釈尊をいかに観るか』9頁)

⁶² この点に関して馬場紀寿氏は、『上座部仏教の思想形成—ブッダからブッダゴースアヘー—』において、論蔵・小部の発展をもふまえたブッダゴースアを中心とする上座部の聖典形成について論じている。

Sv. = *Sumaṅgalavilāsini* (*Dīgha-nikāya-aṭṭhakathā*) Part 1, 1886. Part 2, 1931. Part 3, 1932.

Th. = *Theragāthā*, rep. 1966.

Vin. = *Vinaya-piṭaka*, 6 vols., rep. 1997.

参考文献

*和文は著作者の五十音順。それ以外はアルファベット順に表記した。なお本論では直接言及しなかったものも若干ここに含めた。

<訳注>

中村元編集『原始仏典』全7巻 春秋社 2003-2005年

片山一良『パーリ仏典 中部』全6巻 大蔵出版 1997-2002年

片山一良『パーリ仏典 長部』全6巻 大蔵出版 2003-2006年

丘山新ほか『現代語訳阿含経典』全6巻 平河出版社 1995-2005年

村上真完・及川真介『仏のことば註』全4巻 春秋社 1986-1989年

梵文仏典研究会「梵文「沙門果経」和訳 (1)」『仏教大学仏教学会紀要』1994年3月

「梵文「沙門果経」試訳 (2)」『仏教大学仏教学会紀要』1995年3月

<論文・著作>

赤沼智善『原始佛教之研究』法蔵館 復刻版 1981年

『佛教経典史論』法蔵館 復刻版 1981年

『漢巴四部四阿含互照録』法蔵館 復刻版 1985年

宇井伯寿『印度哲学研究』第2巻 岩波書店 復刻版 1965年

『印度哲学研究』第3巻 岩波書店 復刻版 1965年

榎本文雄「初期仏教における三明の展開」『仏教研究』第12号 1982年12月

勝本華蓮「十善業道という戒」『印度学仏教学研究』第52巻第1号 2003年12月

金兎黙存「原始仏教に於ける戒の根源的意義」『日本仏教学会年報』第32号 1967年3月

田中教照『初期仏教の修行道論』山喜房仏書林 1993年

中村 元『原始仏教の思想 I』中村元選集決定版第15巻 春秋社 1993年

西 義雄『原始仏教に於ける般若の研究』西義雄仏教学研究第1 大東出版社 改訂版 1978年

西本龍山『四分律比丘戒本講讀』大谷大学内安居事務所 1955年

馬場紀寿『上座部仏教の思想形成—ブッダからブッダゴーサへ』春秋社 2008年

平川 彰『律蔵の研究 I』平川彰著作集第9巻 春秋社 1999年

『原始仏教の教団組織 I』平川彰著作集第11巻 春秋社 2000年

舟橋一哉『原始仏教思想の研究—縁起の構造と実践—』法蔵館 1952年

平岡 聡「神通／神変の効能と使用上の注意」『仏教研究』第36号 2008年3月

- 細田典明『梵網經』と『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』『印度哲学仏教学』第7号 1992年10月
- 本庄良文「シャマタデーヴァの伝へる阿含資料―世品（5）「梵網經」―」『神戸大学教育諸学研究論文集』第6号 1992年3月
- 前田恵学『原始佛教聖典の成立史研究』山喜房仏書林 1964年
『釈尊をいかに観るか』前田恵学集第1巻 山喜房仏書林 2005年
- 松田和信「梵文長阿含のTridaṇḍi-sūtraについて」『印度学仏教学研究』第54巻第2号 2006年3月
- 神子上恵生「インド正統派の思想と初期仏教」『仏教学研究』第50号 1994年3月
- 水野弘元『パーリ論書研究』水野弘元著作選集第3巻 春秋社 1997年
- 南 清隆「三学の成立と展開」『華頂短期大学研究紀要』第50号 2005年
- 森 祖道『パーリ仏教註釈文献の研究』山喜房仏書林 1984年
- 山極伸之「パーリ長部「戒蘊品」と律蔵」『仏教大学文学部論集』第80号1996年3月
- Bucknell, R. “The Buddhist Path to Liberation: An Analysis of the Listing of Stages” *Journal of the International Association of Buddhist Studies* , vol.7, part2, 1984.
- Hartmann, J.-U. “Contents and Structure of the Dīrghāgama of the (Mūla-) Sarvāstivādins” *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University* (『創価大学国際仏教学高等研究所年報』), vol.7, (March) 2004.

